

2025年（会報第32号）

山行記録



新津ハイキングクラブ



■表紙について

表紙のスタイルを変更しました。会員番号 1759H.R さんの作品です。苦しい山登りの助けになるのが、山友です。表紙の山友は、頼もしそうですね。皆んな一緒になって、頑張っていますね。頂上に着いて、リュックを降ろせば、達成感はひとしおです。リュックも疲れています、嬉しそうです。持ち主と一緒に、360度パノラマ景色を眺めているのでしょうか。心が暖まり、思わず頬が緩んでしまう楽しい作品です。

皆さん、それぞれ思い思いのストーリーを描いてみてください。表紙の一枚から物語が広がっていきます。(441N.M)

■編集後記

2024年の幕開けは、誰しもが予想もしていなかったいきなりの『能登半島地震』でした。ようやく新型コロナが落ち着いて来て、再び平穏な日常生活に戻ることができそうだなあと思っていた矢先の出来事でした。地震だけでも大変な不幸なのに、9月には『奥能登豪雨』まで発生し、能登半島の人たちは、踏んだり蹴ったり、泣きっ面に蜂、なんて軽々しく言われたくない程の大災害となり、喪失感で、生きる夢も希望も奪われてしまったのではないのでしょうか？

そんな被災者の皆さんには、大変心苦しいのですが、こういった大災害が起きる度に、「あ～自分の身に降りかかるような災害でなくて、良かったあ。他人事で良かったあ。自分は、なんて強運なんだろう」って、思わずにいられません。

その一方で、『東日本大震災』で被災された人の中には、家を津波に流されて、避難所での集団生活となったのに、津波を【津波様】と呼び、【震災が幸せを運んでくれた】と大喜びしていたお年寄りもいたそうです。

宮城・石巻の家を津波に流された『村上愛子』さん。当時69歳で一人暮らしだった愛子さんは、避難所での集団生活によって、今まで知り合うこともなかった近隣の住民と寝食をともにする事となり、心がつながるかけがえのない時間を過ごす事ができた。その後、仮設住宅に移っても、外に出て近所の人達と笑って話せる日々。でも、復興住宅に移ったら、一人暮らしに逆戻り。震災を生き延びた強かりしお年寄りは、いとも簡単に壊されていく、人の為の住宅で。76歳で死去。

そんな愛子さんの震災後に生きた8年間を記録したドキュメンタリー映画『風に立つ愛子さん』（藤川佳三監督）が、2/22から全国で順次公開されるとのこと（YouTubeに予告編あり）。作中では「被災者」と一括りにはできない一人の人生を映し出し、高齢者の一人暮らしや、それに伴う孤独死についての問題を浮かび上がらせているとのこと。

これは、高齢者に限った事ではなく、若者だってそうははず。学校や職場や近所で、普段は話をしない人とでも、「おはようございます！」って挨拶したら、「おはようございます！」って返事が返ってくれば、その瞬間だけでも、心がつながったと思えて、ほっこりするはず。本会の会員の皆さんも、そのような人と人との心のつながりを求めて、参加されているのでは、ないのでしょうか？（1817K.K）

発行日：2025年（令和7年）2月1日

編集者：事務・広報 1795 I.K、1817K.K

発行団体名：新津ハイキングクラブ <https://niitsuhc.jp>



